

記紀歌謡に歌われたもの (二)

—植物を中心に— (上)

岡 田 喜久男

古事記歌謡百十二首、日本書紀歌謡百二十八首の計二百四十首が、記紀歌謡の総数である。句数としては、三句のものから、不整形長歌の五十一句までで、歌体も、片歌・旋頭歌・短歌・長歌と様々である。『古事記』『日本書紀』が本来史書であることから、記紀歌謡も、一首一首の作者や時代は明記されてはいるが、後世のように、実作者の認定、作歌年代の決定が容易ではなく、殆んどが仮托された作者であり、と伝えられた時代である。それは、神々の時代のみならず、天皇治世の時代になっても同様である。

もちろん、今その事によつて古代歌謡の価値を云々しようと言うのではない。本来、集団の中で生まれ育れた古代歌謡が多いのであるから、制作年代や作者が明瞭になる方が珍らしいのである。「記紀歌謡」研究の困難さは実にそこにあつて、幾多の学者が多くの説を立てて来たのである。

然しながら、ここに明瞭な形を持ち、比較的客観的な論究の対象となるのが、歌謡歌詞中の語彙・語法である。記紀歌謡は一字一音式の表記がされていて、かなり忠実に原音に戻すことが出来、歌詞の復原が可能である。その点において、『万葉集』で、第九番歌が

未だ定訓を得なかつたり、訓仮名のヨミが、歌としての良否に直結する短歌がかなりあるのとやや趣を異にしている。

以下、記紀歌謡における植物の実態と、その歌謡の中における働きについて詳しく見てみたい。かつて私は、記紀歌謡中の「鳥」に注目した(本紀要第十一号)のであるが、「鳥」以上に植物は多数かつ多様に歌われているし、万葉以下の和歌史を辿る時、「花鳥風月」或いは「雪月花」の語に象徴されるように、植物を歌い込む事は、和歌の世界では極めて大きな比重を占めていたからである。『万葉集』の植物については、松田修氏に『萬葉植物新考』他の著書があり、「上代人の生活と万葉植物」(『植物文学研究』とエッセイ古典の花)の中で

ただ万葉集の場合特に考えられることは、現われている数は、わずか一五〇種にすぎないが、枕詞その他で植物と結ばれた歌が多く、万葉歌数、四四九六首の約三分の一、一五四八首は植物をよんだ歌か、あるいは植物と関係ある歌で、これは大いに注目すべきことで、また、文学的価値からすれば、万葉集くらい自然を背景にし、これをおりこんでいる文学もないとい得る。

と述べられてゐる通りに、まさしく『万葉集』は、歌の中に豊かに植物を詠み込んでゐるのである。

ところが、記紀歌謡も量的に『万葉集』に劣らず植物を詠み込んでゐるのであつて、歌の中における働きでは万葉よりも実生活を反映してゐる力強い面も多い。先に述べたように、記紀歌謡はいつ、誰によつて歌い始められたか分からないものが多いが、歌われてゐる題材は作意を反映し、人々の感情がよく窺へると思う。その最もよき例が植物の歌われ方である。

次に記紀歌謡における植物の歌われ方を実際の用例で示すが、植物の種類や、その現代植物名を明確にするのが目的ではないので、枕詞や人名に關係するものも挙げることにする。(尚算用数字は『古事記』の、漢数字は『日本書紀』の歌謡で、その歌謡番号はいずれも『古代歌謡』日本古典文学大系に拠つた。)

〈記〉

- 3…萎え草の 女にしあれば…袴網の 白き腕
- 4…ぬば玉の 黒き御衣を…山縣に 蒔きし 藍蓼春き 染木が 汁に…山處の 一本薄…若草の 妻の命…
- 5…若草の 妻持たせらめ…袴袵 さやぐが下に…袴網の 白き腕
- 9…立肌稜の 実の無けくを…袴 実の多けくを…
- 11…粟生には 臭韭一本 其ねが本 其根芽つなぎて 撃ちてし止まむ
- 12…垣本に 値えし椒 口ひびく…

- 14…木の間よも 行き目守らひ…
- 19 葦原の 密しき小屋に 菅畳 いやさや敷きて我が二人寝し
- 20…木の葉さやぎぬ 風吹かむとす
- 21…風吹かむとそ 木の葉さやげる
- 23 やつめさす 出雲建が 佩ける太刀 黒葛多巻き さ身無しにあはれ
- 29…尾津の崎なる 一つ松 あせを 一つ松 人にありせば…一つ松 あせを
- 31…豊薦 平群の山の 熊白袴が葉を 髻華に挿せ その子
- 34…なづきの 田の稻幹に 稻幹に 這ひ廻ろふ 解葛
- 35…浅小竹原 腰泥む…
- 36…大河原の 殖草 海がは いさよふ
- 41 千葉の 葛野を見れば…
- 42…歯並は 椎菱なす 樅井の 丸廻坂の土を…三粟のその中つ土を…
- 43 いざ子ども 野蒜摘みに 蒜摘みに…香妙し 花橋は上つ枝は 鳥居枯らし下枝は 人取り枯らし 三粟の 中つ枝の ほつもり 赤ら嬢子を…
- 44…専繰り 延へけく知らに…
- 47…冬木の 素幹が下木の さやさや
- 48…白袴の生に 横白を作り…
- 51…渡瀬に 立てる 梓弓檀 い伐らむと 心は思へどい取らむと 心は思へど 本辺は 君を思い出 末辺は 妹

を思ひ出…い伐らずそ来る 梓弓檀

53…おしけるや 難波の崎よ 出て立ちて 我が国見れば 淡

島 淤能基呂島 檳榔の 島も見ゆ さけつ鳥見ゆ

54…山縣に 蒔ける松葉も…

57…川の辺に 生ひ立てる 鳥草樹を 鳥草樹の木 其が下に

生ひ立てる 葉広 齋つ真椿 其が花の 照り坐し 其が

葉の 広り坐すは 大君ろかも

58…我が 見が欲し国は 葛城高宮 我が家のあたり

61…木欽持ち 打ちし大根 根白の 白腕…

63…木欽持ち 打ちし大根 …弥木栄なす 来入り参来れ

64…八田の 一本菅は…あたら菅原 言をこそ 菅原といはめ

あたら清し女

65 八田の 一本菅は 独り居りとも…

74…門中の海石に 振れ立つ 漬の木の さやさや

79 笹葉に 打つや叢の たしだしに…

80…刈薦の 乱れば乱れ さ寝しさ寝てば

87 夏草の 阿比泥の浜の 蠣貝に…

88…山たつの 迎へを行かむ…ここに山たつと云え

89…櫛弓の 伏る伏りも 梓弓 立てり立てりも…

91…畳薦 平群の山の 立ち栄ゆる 葉広熊白椿 本にはい

組竹生ひ 末へには た繁竹生ひ い組竹 い組みは寝ず

92 御諸の 巖白椿が本 白椿が本 忌々しきかも 白椿原嬢

女

93 引田の 若栗栖原 若くへに…

95 日下江の 入江の蓮 花蓮 身の盛り人 羨しきろかも

97…白妙の 袖着備ふ

98…我が逃げ登りし 在峰の 榛の木の枝

100…竹の根の 根足る宮 木の根の 根蔓ふ宮…真木栄く 檜

の御門 新菅屋に 生ひ立てる 百足る 櫛が枝は 上つ

枝は 天を覆へり 中つ枝は 東を覆へり 下づ枝は 鄙

を覆へり 上つ枝の 枝の末葉は 中つ枝に 落ち触ばへ

中つ枝の 枝の末葉は 下つ枝に 落ち触ばへ 下づ枝の

枝の末葉は…

101…新菅屋に 生ひ立てる 葉広 齋つ真椿 其が葉の 広

り坐し 其が花の 照り坐す 高光る 日の御子に…

107…臣の子の 八重の柴垣 入り立たずあり

109 大君の 御子の柴垣…截れむ柴垣 焼けむ柴垣

111 浅茅原 小谷を過ぎて…

〔紀〕

四 沖つ藻は 辺には寄れども…

七 立柵棧の 実の無けくを 扱きしひえね…冷 実の多けく

を…

十二…伊那佐の山の 木の問ゆも…

十三…垣本に 粟生には 臭葎一本 其のが本 其根芽つなぎて

撃ちてしまむ

十四…垣本に 植えし 椒 口びひく 我は忘れず 撃ちてし止

まむ

二十…黒葛多巻き さ身無しにあはれ

二三…曇薦 平群の山の 白檀が枝を 警華に挿せ この子

二四 朝霜の 御木のさ小橋 侍臣 い渡らすかも 御木のさ

小橋

二七 尾張に 直に向かへる 一つ松 あはれ 一つ松 人にあ

りせば…

二八 彼方の あらら松原 松原に 渡り行きて 槻弓に まり

矢を副へ…

三四 千葉の 葛野を見れば…

三五 いざ吾君 野に蒜摘みに 我が行く道に 香ぐ

はし 花橋 下枝らは 人皆取り 上枝は 鳥居枯らし

三六…三粟の 中つ枝の 合隠り 赤れる嬢子 いざさかば良な

三九 櫃の生に 延へけく知らに… 菱茎の 刺しけく知らに…

四一…門中の海石に 振れ立つ 漬の木の さやさや

四三…渡手に 立てる 梓弓檀 い伐らむと 心は思へど い

取らむと 心は思へど 本辺は 君を思ひ出 末辺は 妹

を思ひ出…い伐らずそ来る 梓弓檀

五三…川隈に 立ち栄ゆる 百足らず 八十葉の木は 大君ろか

も

五六 つのさはふ 磐の媛がおほろかに 聞こさぬ 末桑の木…

寄ろほひ行くかも 末桑の木

五七…木歛持ち 打ちし大根…うち渡す 弥木榮なす 来入り参

来れ

五八 …木歛持ち 打ちし大根 根白の 白腕…

六十 隼は 天に上り 飛び翔り 斎楓が上の 鶴鷄捕らさね

六七 花妙し 桜の愛で…

六八 …いさな取り 海の浜藻の 寄る時々を

七六 …我が 逃げ上りし 在峰の 榛が枝 あせを

七八 …伊勢の野の 栄枝を 五百経る懸きて…

八三 稲筵 川副楊 水行けば 靡き起き立ち その根は失せ

ず

八五 浅茅原 小碓を過ぎ…

九一 …八符の柴垣…地震が揺り来ば 破れむ柴垣

九四 …石の上 布留を過ぎて 薦枕 高橋を過ぎ 物多に 大

宅過ぎ…

九六 …真木栄く 檜の板戸を…真栄葛 手抱き又はり

九七 …流れ来る 竹の い組竹世竹 本へをば 琴に作り 末へ

をば 笛に作り…つぬさはふ 磐余の池の…

百 …大葉子は領巾振らすも 日本へ向きて

百一 …大葉子は領巾振らす見ゆ 難波へ向きて

百四 …さす竹の 君はや無き…

百五 畝傍山 木立薄けど…

百七 岩の上に 小猿米焼く 米だにも…

百九 はろばろに 言を聞こゆる 島の葦原

百十一 小林に 我を引き入て…

百十二 本毎に 花は咲けども 何とかも 愛し妹が また咲き

出来ぬ

百十七 射ゆ獣を 認ぐ川辺の 若草の 若くありきと 吾が思は
なくに

百二十五 橘は 己が枝枝 生れれども 玉に貫く時 同じ緒に貫く
百二十六 水葱の本 芹の本 吾は苦し
百二十八 赤駒の い行き憚る 真葛原：

繁を厭はず全用例を挙げたのであるが、記紀歌謡の中における植物の実態は、『万葉集』におけるそれに劣らず、全二百四十首中九十一首と言う多さと多様でかつ身近なものであることが明らかになつたと思う。次に右の用例を、植物の種類及びその他、と修辭の働きの二面から整理し、論を進めたい。その為に、右の用例を、まず(1)植物の種類 (2)植物の凡稱・部分稱 (3)関係語彙の三点で整理してみる。(一)首中に二回以上出ている場合は特に示さなかつた。)

(1)植物の種類

- 葦 19 檳榔 53 藍蓼 4 粟 11 十三 苺菜 54 稔 9
- 七 稻 34 八三 大根 61 63 五七 五八 白樺 31 48 91 92 二
- 三・三九 香韭 11 十三 葛百一八 桑五六 栗 42 43 93
- 95 三五 薦 80 桜六七 笹 79 烏草 樹 57 小竹 35
- 椎 42 白檀 二二三・二九 菅 19 64 (菅 64 65) 薄 4
- 芹 百二六 瓜稜 9 七 栲 3 5 竹 91 100 橘 百二五
- 茅 山 八五 槻 100 六十 黒葛 23 二十 椿 57 101 冬菫 菹 葛
- 34 水葱 百二六 蓴 44 三六 烏玉 3 4 椒 12 十四
- 蓮 95 (花橘 43 三五) 榛 98 七六 檜 100 九六 菱 42 三

記紀歌謡に歌われたもの(二) — 植物を中心に — (上)

六 蒜 43 松 29 二七・二八 檀 51 四三 藻 四・六八
楊 八三 やまたづ 83

(2)植物の凡稱・部分稱等

- 粟生 八十三 い組竹 91 九七 榲 幹 34 末葉 100 枝 100 二
- 三 枝々 百二五 白樺の生 48 三九 木 74 四一 草 3 36 87
- 木 二四 木立 百五 木の間 14 十二 木の葉 20 21 笹葉 79
- 下枝 43 100 三五 柴垣 107 109 九一 素幹 47 菅原 64 染木
- 4 たしみ竹 91 100 さす竹 百四 葉 31 中つ枝 43 100 三
- 五 花 57 101 六七・百十四 根 11 61 100 五三・八三 葉 広 熊
- 白樺 91 葉 広 真 椿 57 101 原 19 35 64 93 111 二八・八五・百九
- 百二八 冬木 47 真木 栄 く 100 九四 実 9 七 芽 11 弥
- 木 栄 なす 63 五七 八十葉の木 若草の 4 5 百十七

(3)その他の植物関係語彙

- 梓弓 51 89 四三 い伐らむ 51 43 稲 筵 八三 櫟 井 42
- い取らむ 51 四三 植 多 草 36 打ちし 61 63 五七・五八 大
- 葉子 百・百一 白樺 原 娘 子 92 葛野 41 三四 葛城 高 宮 58
- 五四 花 妙 し 六七 木 鋏 61 63 五七・五八 米 百 七
- 晝 薦 31 二二三・九四 菅 畳 19 さやぐ 5 末 辺 51 四三・
- 九七 栲 綱 3 5 栲 袋 5 槻 弓 89 二八 春 ぎ 4
- 摘み 43 三五 つのさは ぶ 九七 萎 え 草 3 延 へ 44 三六
- 一本 4 64 65 ほつもり 43 蒔 く 4 本 11 91 十三 百 十四
- 百二六 本 辺 51 四三・九七 小 林 百 十一

(1)の植物自体の種類限定は、重要ではあるがその道の専門家の手に委ね、ここでは、もっぱら、歌謡の中での植物のあり方を中心に考えてみたい。(一)内は原文、○はその部分を示す為に付した。

(1)、葦19(阿斯波良能)

葦ほど、原始的なイメージを負っている植物は他にない。記紀ともに関巻冒頭に登場する植物で、「古事記」では

国稚く浮きし脂の如くして、海月なす漂よへる時、葦牙の如く萌え騰る物に困りて成れる神の名は、宇摩志阿斯訶備比古遲神

とある。国土の成長力が神格化されて神名(書紀では可美葦牙彦尊)となつているのであるが、海月と言ひ、葦の芽と言ひ、身辺の小さなもので語られる壮大な国土生成の神話には不思議な魅力が溢れている。葦は、この他にも、葦船、豊葦原中国、豊葦原之千秋長五百秋之水穂国、若葦など、神話における重要な語に葦が含まれている。古代日本に、葦の群成する所が方々にあり、そこは又農耕に適した湿地帯でもあった。その上、葦の若芽は食用になり、莖葉は屋根の用材に、茎は編まれて簾になつた。

神話的な植物であつたことは、嘉祥二年(849)三月、興福寺の法師達(仁明天皇の宝算四十の賀に献つた三百十句に及ぶ大長歌が

日の本の 大和の国を 神ろきの 少彦名が 葦菅を 殖
ゑ生しつづ 国固め 造りけむより おきつ波 たつ年毎に…

と歌い始められていて、大和の国の創造者少彦名が、葦や菅を殖えて、国土を固めたと言んでいることから分かると思う。葦は、神話的であると同時に、実生活においても重要かつ身近な植物であつ

たから、神武記の皇妃決定物語の最後の歌にも登場したのであつた。

(2) 檳榔53(阿遲摩佐能)

あぢまさは、垂仁記に「檳榔之長穗宮」、「本草和名」に「檳榔阿知未佐」とある。中国で言う「檳榔」と違って、蒲葵の事であるとする説が有力で、柳田国男は、「阿遲麻佐の島」(『海南小記』所収)の中で、紀州に自生していた証拠を挙げて詳説している。平安時代には牛車の屋根をこの葉でふき、「檳榔毛の車」と呼んで、太上天皇以下上卿の乗用に供された。

53の歌は、仁徳天皇の大后石之日壳嫉妬物語中の一首で、大后を欺き、愛する黒日壳を追いかけて吉備へ行く途中の、淡道島における天皇の歌と記されているが、先に挙げた歌を見れば明らかになうに、「見れば…見ゆ」の典型的な国見歌・山見歌の形式であり、本来国土礼讃の祝歌であつたと思う。そう考えると、淡島・淤能基呂島とともに、伊耶那岐命、伊耶那美命が鳥々を生成された時の鳥で、神話中でも最も有名な鳥であり、これ等の鳥が歌われたのも理解できるのである。

勿論、檳榔が実際に生い茂り、それを見て仁徳天皇が歌われたわけではなく、予祝の意で歌われたのであるから、珍しい木の繁る島を歌い込んだだけであらう。

尚『記紀歌謡評釈』(山路平四郎著)は、「あぢ」を(集)の意とし、「まさ」を「ます」(座)や「まさか」のいずれかと関係する「眼前の」の意と解し、「近くに集まつている鳥をアチマサの鳥といつたのかも知れない」と新説を立てている。「さけつ鳥」が遠くの鳥を意味するとすれば、意味上も、語構成の上からも考えられる説で

あるが、用例を他に求める事が出来ないし、本論文の性格上、植物のアザマサと考えたい思いもあつて、旧来の説に従うことにした。

くの島と言ふ言い方にしても、新しい表現形式で新鮮な表現であつたように思える。いずれにもせよ、眼前に広がる海と島の風景は、雄大なイメージを聞く者に与え、神話的な時間の広がりを感じせしめたのである。

(3) 藍蓼4 (麻岐斯阿多弓都岐)

真福寺本『古事記』では「阿多多臣」とあつて、誤字説や、「茜」説、「藍蓼」説、があつて何を指したか俄には決め難い。然し、藍色の染料を春き絞る植物名であることは疑いがなく、今は、上村六郎氏の説(「茜染」考 奈良文化第十二号所載)を認めた、古典大系本『古代歌謡集』の補注に従いたい。山の畑に蒔いた藍蓼を白で春いて得た染料、その汁で染めた衣、と具体的に染色の様子を歌っている。この歌は、嫡后(おほなご)の嫉妬深さに悲鳴を挙げた大國主神が、出雲から大和へ出発しようとして、歌つたものであるが、着る物の色を黒から青、更に藍色へ着替えて満足する姿には、兄弟の八十神達に勝つて稲羽(いなう)(因幡)の八上比売を獲た、英雄神大國主神の佛は無い。染め色の美しさを競う、衣裳比べの、楽しく明るい歌い振り

(4) 粟11 (阿波布爾波) 十三 (阿波赴瑠破)

書紀本文にも「粟田」とあるように、粟は古くから栽培された。

— 植物を中心に — (上)

粟も神話の中に登場する穀物で、『古事記』では、大氣津比売神が須佐之男命に殺された時、

殺さえし神の身に生れる物は、頭に蚕生り、二つの目に稲種生り、二つの耳に粟生り、鼻に小豆生り、陰に麦生り、尻に大豆生りき。故是に神産巢日御祖命、茲れを取らしめて、種と成しき。

とあつて、粟が出現している。『日本書記』では、月夜見尊に殺された、保食神(うけかみ)の顛(ひたう)の上に粟が生つたとあり、その粟稗等の出現を喜んだ天照大神は、「是の物は、頭見しき蒼生(あざう)の食ひて生くべきものなり」と云つたとある。粟が稲とともに重要な食料であつた証拠で、朝廷の軍隊であつた久米部は恐らく防人と同様に、屯田兵式に生産に従事していたと思われるので(たとえ、そうでないにしても、粟を生活の為に作ることは一般的な事であつた)、このように歌詞として粟生が歌われたのであつた。この歌では「香韭(かみら)」が主役で、粟生は単に香韭が生えている場所のように歌われているが、実際は、貴重な食糧である粟畑に、韭が生えていて、その邪魔な韭の奴を根こそぎ引き抜くように、敵を徹底的にやつつけようと言つてであつた。

(5) 菘菜54 (麻祀流阿袁那母)

54の歌の直前に、「ここに大御羹を煮むとして、その菘菜を採める時に」とあるので「菘菜」あをな」となるが、菘が『本草和名』に「菘多加奈」とあることや、『和名抄』に「蔓菁(まむす)上音婆和」とあり、蔓菁が無菁、即ちかぶらとあることなどから、今の何に当たるか考察されているが、『古事記伝』に

：字には拘るべからず、凡そ古人は、字をば心々に当たればなり、今世に云菜なり、今も青菜とも云なり、那と云は、凡て魚菜の惣名なる故に、菘をば古は分て、阿衰那と云しなり。今は菘に限りて、那とはいふなり。

とあるのに従うべきで野菜と理解するのが穩当であろう。この歌は、先に述べた仁徳天皇と黒日売の物語（石之日売の嫉妬物語の一つ）の中の歌であるが、その歌は

54 山県に蒔ける菘菜も吉備人と共にし摘めば楽しくもあるかとなつてゐる。『記紀歌謡評釈』山路平四郎著（以下『評釈』と呼ぶ）

山島の菘菜の採集を辛いものとして、どんなわざでも、愛人と一緒にすれば楽しい、といった一般性をもつた農村民謡であつたものが、吉備氏伝承の物語に定着する際に、「吉備人」という形をとり入れたものであろう。

というのが適切であろう。「蒔く」については、後に関連語彙の所で検討するが、「山の島に青菜を蒔く」生活が、具体的に歌われ、しかもその生活習慣が辛い、と感じる人達がいたことが分かり、貴重な歌謡である。時代は下るが、『土佐日記』承平五年正月九日のところに載せる船歌に

春の野にてぞ音をば泣く、若薄に、手切る切る摘んだる菜を、親やまほるらん、姉や喰ふらん、かへらや。

を思い出すが、「菜を摘む」ことを安易に考へるべきでないことの証であると思う。

なお、「な」は『古事記』に、魚料理のことを「真魚炸」とあり、

『和名抄』にも「肴 野王案凡非穀而食謂之肴胡交反字亦作鱠乃見和朝令」とあるように、副食物を「な」と言ったのであるが、自然界に容易に採れ、栽培の易しい野菜は人々に愛されたようで、「出雲風土記」嶋根郡では、「当 夏節 尤有「美菜」」とあるように、食味にまで話が及んでいる。(1) (4)の植物が、神話的な面を多分に有していたのに比べ、菘菜は食糧としての存在であつた。

(6) 杵9七（伊知佐加紀）

9・七ともに、神武天皇が宇陀の地で、反抗する兄宇迦斯を、兄宇迦斯自身の作つた押機で殺した後の戦勝の歌で、『日本書紀』に「来目歌」とある伝統的な歌謡である。「古事記」では最後に「ええしやこしや こはいのごふそ、ああ しやこしや こは嘲笑そ」と解説を含む囉詞まで付いていて、注目すべき歌である。戦勝の宴に歌う無礼講の歌で、酒に酔つた勢いで歌われたものである。第一段が、

9 宇陀の 高城に 鳴繩張る わが待つや 鳴は障らず
いすくはし 鯨障る、

とワナで鳴を捕る鯨で、思いがけず鯨（大物の比喩）が引つ掛つたことを喜び、第二段で、その喜びを、妻を引き合いに笑い合うのであるが、この部分

前妻が肴乞はさば 立孤稜の 実の無けくを 扱きしひゑね
後妻が 肴乞はさば 杵 実の多けくを 許多ひゑね

で、杵は「実の多けくを」を引き起こす枕詞の序詞として登場している。古典大系本『古代歌謡集』他が「和名抄」の「杵比佐」とあるのを引いて、ツバキ科の常緑低木のヒサカキとするのであるが、

その当否は措き、実がたくさん生る木である事は確かである。また、第一段が動物、第二段が植物で統一されているのも、大饗の内容と関係があつた。

然し、この場合柿の実のように、たつぷりの肴をと比喩として用いられているのであつて、柿がそのまま食用に供されていたのでは無いようである。

(7) 稲 34 (伊那賀良爾) 八三 (伊饒武斯慮)

稲は、『万葉集』では、稲・伊祢・早稲他の形で四十四首(『万葉植物新考』松田修著)の歌の中に出るのであるが、記紀歌謡にはイネの交替形であるイナの前でしかでない。

34の歌は、先に全歌(五句)を書いたが、亡くなった倭建命を御陵に収めた、后や御子等が、「其地の那豆岐田に匍匐ひ廻りて、哭かしのつ歌」つたとされている。家の近くの田の稲茎に這ひまわつてゐる薺葛を歌うことで、全身で悲しみを現している后や御子等を喩えているのであるが、悲しみの表現にふさわしくないとして、恋の民謡の表現だとする説が(『古代歌謡全注釈古事記編』土橋寛など)あるが、『評釈』に(尚「評釈」はここで言う34歌を35歌としている。)

〈35歌〉は、本来、童謡であつたらうとも云われ、また、恋の民謡だつたらうとも云われているが、それにしては、あまりにも物語に即応した内容である。勿論、その前文は歌謡によつて書かれたものであろうから論外として、歌謡の「這ひ廻らふ」は、おそらく葬儀における慟哭の具象化であつたらう。——中略——すなわち根茎(芋)のある野老の蔓を、匍匐う子持ちの妻、

稲幹を夫の亡骸、涙に湿れた水漬しの場を、ナツキの田とすれば、万事が葬儀における泣きそはつ所作の比喩化で、この一首は知的な机上作品であつたように思われる。

とあるのに心ひかれる。

八三の歌は、父を殺された後の仁賢天皇と顕宗天皇の兄弟が、播磨国に逃げていたが、新嘗の供物を調達に來た、伊予來目部小楯の前で、新室寿をシ・更に身分を明らかにする物語の中の歌で、「稲蓆」が「川」の枕詞であることは諸注釈の一致するところであるが、その原義については諸説あつて定まらない。『万葉集』では、「伊奈字之呂川に向き立ち：」(一五三〇)とあるので、既に意義が忘れられていたのかもしれない。ただ「稲蓆」は、稲の藁で作つた蓆で万葉にも

玉梓の道行き疲れ伊奈武思侶しきても君を見むよしもがも(二六四三)

のようであつて実際に使用されていた事が分かる。

右のように、稲幹・稲蓆の二例とも、稲作りを主とした農耕民族にしては、末節の歌われ方をしてゐるが、それは記紀歌謡の多くが民謡・民衆のレベルの歌でない場で歌われ始め、伝承されてきた事と深く関係していると思うが、それは後に又述べることにしたい。

(8) 大根 61 (字知斯澁富泥) 63 (字知斯意富泥) 五七 (字智辭於朋泥) 五八 (字知辭於朋泥)

この四首ともに仁徳天皇が、山城の実家に帰つた石之日亮皇后に歌い掛けたものである。

61 五八：木鋏持ち 打ちし大根 根白の 白腕

63 五七：木歛持ち 打ちし大根 さわさわに 汝が言へせこそ：
のような歌い方をされているが、61と五八、63と五八は歌の順番や
用字は違いますが、歌詞は全く同じで、記紀四首の歌の出所が同じであ
る事によると思われる。

大根は、先程の稻と反対に、記紀に見えて、『万葉集』に一例も
無い珍しい例である。今日、ダイコンと言うのは、おほねに大根の
字を宛て、それを音読みしたのであるが、『和名抄』に「薑音福和
根音福和根正白而可食之」とあつて、白い事が注目されている。天平
宝字二年(758)の古文書に

「卅七文大根十把直」とあるから、古い用字であつたが、食用とし
て広く行き渡っていたらしく、ここで見るように「山城の女が、木
の歛で掘り起こす大根、その大根の白いように(61五八)、その大
根の葉がザワザワ音を立てるように(63五七)」と本旨へ転換する
材料として歌われている。今でも洗いたての大根の白さは目に染み
るようで、「大根洗」は俳句の季語にもなつているが、その白さか
ら、女性(石之日売)の腕たね(ひじから手首まで)へ歌い続けてい
るのが、皇后の嫉妬深さに悩む仁徳天皇であるから、いつそう聴く
者の興味をひくことになるのである。石之日売嫉妬物語中の歌謡に、
菘菜や大根が、このように具体的に歌われているのは、山城の土地
の産物として有名であり、広く食されてきたからだと思われる。

『催馬楽』の「山城」に

山城の 豹まのわたりの 瓜つくり な なやや らいしなや
さいしなや 瓜つくり 瓜つくり はれ

瓜つくり 我を欲しといふ いかにせむ な なやや らい

しなや さいしなや いかにせむ いかにせむ はれ
いかにせむ なりやしなまし 瓜たつまでに や らいしな
や さいしなや 瓜たつま 瓜たつまでに
と、瓜を作る人が歌われているが、山城の地が作物を豊かに産する
地の一つの証拠である。

なお、白い腕を歌い出す為には、記紀歌謡にもう一つ「袴たば網の」
という枕詞があり、後に検討するが、『万葉集』には、同じ袴たばを
含んだ「袴たば衾ま」(こぞの織維で織つた夜具)、「袴領たばの巾の」が白にか
かる枕詞として用いられている。(つづく)